埋文にいがた

MAIBUN

新潟県埋蔵文化財センター
MAIBUN NIIGATA
2021 July
第115号

発掘調査 整理遺跡 紹介

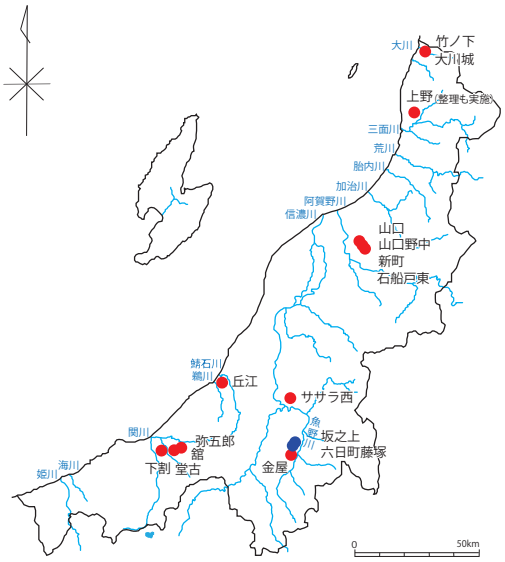
上越市**堂古遺跡**　令和３年度の発掘調査・整理遺跡

新企画　**わが町の文化財紹介　まいぶん！これが最前線！**

村上市 上野遺跡
敷石住居

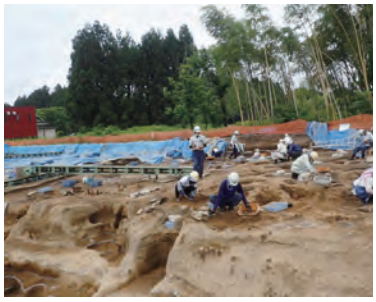
令和３年度 本発掘調査遺跡・整理遺跡の紹介

令和３年度は、本発掘調査を村上市竹ノ下遺跡・大川城跡・上野遺跡、阿賀野市石船戸東遺跡・山口遺跡・新町遺跡・山口野中遺跡・長岡市ササラ西遺跡、柏崎市丘江遺跡、南魚沼金屋遺跡・六日町藤塚遺跡、湯沢町宮林B遺跡、上越市下割遺跡・堂古遺跡・舘遺跡・弥五郎遺跡の16遺跡、整理作業を村上市上野遺跡、南魚沼市六日町藤塚遺跡・坂之上遺跡の３遺跡について実施しています。



遺跡位置図

上野遺跡（村上市猿沢・桧原）



昨年度多量の焼人骨が見つかった縄文時代後期の大規模な集落跡です。今年度は集落の本体を調査します。

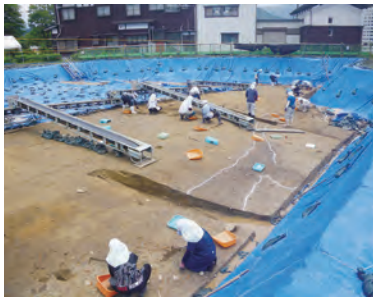
大川城跡（村上市府屋）

山形県との県境付近にある戦国時代の山城の一部を調査します。

ササラ西遺跡（長岡市川口中山）

鎌倉・室町時代の水田跡と縄文時代後・晩期の川跡が見つかっています。写真は鎌倉・室町時代の水田跡の調査の様子です。

金屋遺跡（南魚沼市余川）



昨年度鉄製の轡が発見され話題になった平安時代の遺跡です。今年度も引き続き調査を行います。

下割遺跡（上越市米岡ほか）

縄文時代から中世まで断続的に営まれた遺跡です。高田平野では数少ない縄文時代の遺物の出土が期待されます。

上野遺跡、六日町藤塚遺跡・坂之上遺跡（南魚沼市余川）

今年度は3遺跡の整理作業を進めています。3遺跡とも整理作業は昨年度から継続しています。上野遺跡は現在も調査が継続中の縄文時代後期の遺跡で、今年度は土器の接合・復元や実測遺物の抽出、実測・拓本などを行います。六日町藤塚遺跡・坂之上遺跡はともに古墳時代中期・後期の遺跡で今年度は報告書刊行に向けて遺物の写真撮影や原稿執筆などを行います。

2021年度
発掘調査
遺跡の紹介

堂古遺跡Ⅲ
中世の集落

所在地：上越市米岡字堂古

堂古遺跡は高田平野を流れる飯田川左岸の自然堤防上に立地します。標高は14.1～13.9mで東から西に向かって緩やかに傾斜する地形です。

国道253号上越三和道路建設に伴い、平成26・27年にこれまで２回発掘調査を行っており、今回が３回目の調査となります。令和３年度は前回調査区の南東側の延長部分、長さ約90m、幅約4.5m、約415㎡の範囲を調査しました。

遺跡周辺は昭和50年頃まで耕作地として使用されており、遺構上部は一部削平されていますが、大部分は良好な状態で検出しました。

遺構は井戸・溝・土坑・柱穴などを検出しており、平成26・27年調査と連続する中世の集落域であると考えられます。この集落は13世紀～15世紀を中心とする時期に形成され、主に13世紀と14～15世紀を中心とする２時期に大別できます。

調査区西側には幅約5m、深さ約1.5mの大溝が南東から北西方向に延びています。溝の壁は東側の傾斜が急で西側は緩やかに立ち上がります。遺物は土師器・須恵器・珠洲焼、砥石、銭貨などが出土しています。この溝も13世紀と14～15世紀を中心する２時期に大別でき、16世紀には機能を停止し、17世紀には最終的に埋め戻されたと考えられます。この溝を境に東と西で遺構分布に差異があり、区画溝として掘削されたと考えられます。前回調査では、西側は遺構が希薄だとされていましたが、本年度調査では遺構が濃密に分布し南西側にも集落が展開していたと考えられます。

調査区の東側から中央付近にかけて前回調査区から連続するL字型に曲がる溝を東側で２条、西側で３条検出しました。溝に区画された内側には井戸や柱穴が多数確認でき、屋敷を区画していた溝の可能性も考えられます。今回の調査では井戸を17基検出しました。井戸の側板などの痕跡は確認できず、素掘りの井戸であったと考えられます。井戸からは珠洲焼・龍泉窯系青磁、鎌、曲物、石硯、銭貨（聖宋元寶、元符通寶）など中世の遺物が主に出土しました。

今回調査では確認できませんでしたが、前回調査では竪穴状遺構を複数確認しており、工房、倉庫、厩舎としての利用が想定され、自然堤防上の水はけの良い土地条件と豊富な地下水を求めて、この場所に集落が形成されたと考えられます。

西側には隣接して下割遺跡が所在し、周辺の遺跡との関連も注目されます。

（株式会社ノガミ　高尾将矢）

井戸出土鎌（金属部が少し残る）

調査区全景（右上が北）

埋文
インフォ
メーション

令和３年度年度 春季企画展
誰も知らない?! 新潟の米の歴史

現在、全国で生産量日本一を誇る新潟の米。「米どころ」は新潟の代名詞となっています。日本国内で米の生産が始まったのは、約２千数百年前の弥生時代からですが、新潟はお米作りが始まってからすぐに米どころとなったのか。どんな道具で大地を耕し、収穫したお米をどのように調理し、どのように食べていたか。お米作りが始まってから、様々な変化を経て今に至っています。

本展では、これまで新潟県が発掘調査をしてきた遺跡出土品の研究成果を踏まえた展示を通して、意外と知られていない新潟のお米の歴史に迫るものです。

まず、稲作導入前の縄文人の主食について展示しています。遺跡で見つかる食料残骸や人骨の分析から、縄文人は主に木の実でカロリーを摂取したと考えられます。新発田市青田遺跡ではクリをはじめ、多くの木の実が出土しました。出土した土器から、大型の土鍋（写真１）で木の実などを加工し、小型の鍋を使って日常の食事を加工していた可能性が考えられます。

次に、お米の調理方法の変化を展示しています。お米の調理方法には、大きく「煮る」と［蒸す」があります。遺跡から出土する土鍋外面のス、内面のコゲの観察や蒸器の出現から、「煮る」から古墳時代後期～平安時代には「蒸す」に変化していたことが分かりました。中でも、弥生～古墳時代中期は、お米を煮たお湯を捨て、最後に蒸らす「湯取り法炊飯」であったことが、土鍋外面の吹きこぼれが斜めのものがあるため（写真２）分かりました。

続いて、ご飯の食べ方について展示しています。調理法からも弥生～平安時代前半は、お米の粘り気が弱いため箸で持てず、身分の高い人は匙（写真３）で、それ以外の人は手で食べていたと考えられます。新潟県の遺跡で箸がみつかるのは平安時代頃からで、鎌倉時代以降多く出土します。

最後に、大地を耕し、収穫する道具を展示しています。これらの道具は作業工程により、農工具（鍬、鋤など（写真４））、収穫具（石包丁など）、調整具（竪杵、木臼など）に分かれます。道具の素材は、石、鉄、木などがあり、新潟県では長岡市大武遺跡などで木の道具が特に多く見つかっています。是非、新潟県埋蔵文化財センターでご覧ください。　（髙杉晋平）

期　日：令和３年８月22日（日）まで
観覧料：無料

写真１　大型の土鍋
（新発田市青田遺跡）

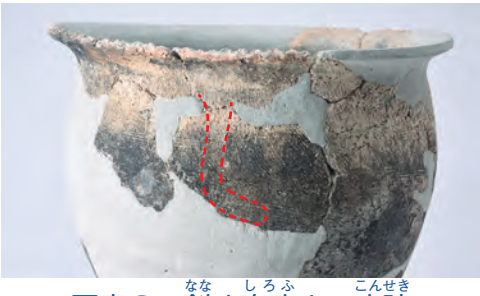


写真２　斜め白吹きの痕跡
（長岡市大武遺跡）

写真３　木製匙
（長岡市大武遺跡）

写真４　直柄鍬身又鍬
（長岡市大武遺跡）

埋文
コラム

箸（はし）について

本誌No.73（2010.12）に「「箸」あれこれ？」として取り上げた「箸」。箸の起源や日本以外の箸食文化、箸の未来は？などが報告されてから10年以上が経過しました。この間に行われた遺跡の発掘調査で分かってきたことや、最新の研究成果を踏まえ、違った角度から箸について考えてみたいと思います。

新潟県で箸が見つかるのはいつからか

高倉洋彰氏によれば、中国の食事用の箸の普及と日本との交流、福岡県の出土遺事例から、弥生時代には箸を使ってオカズ（副食）を食べる習俗が伝わった可能性が高いとのこと。それが徐々に普及し、飛鳥時代（西暦600年代）を経て、奈良時代（710～793年）でも後半に日本各地へ普及していったとされています（高倉2011）。

新潟県ではいつ、どんな遺跡から見つかるかを確認します。古い例では、新潟市的場（まとば）遺跡や緒立（おたて）遺跡、柏崎市箕輪（みのわ）遺跡などがあります。これらは８～９世紀、奈良時代～平安時代の遺跡です。高倉氏の日本列島に箸が普及していった、とされる奈良時代後半頃に一致する可能性があります。箸が見つかるのは、普通のムラではなく、役所（官衙（かんが））などの公的（こうてき）な性格の遺跡です。

箸が遺跡から見つかる量が増えるのは、鎌倉時代・室町時代（中世）からです。木製の箸は、腐（くさ）ったり、使用後に燃料に使われたため遺跡から見つからないことも考えられますが、鎌倉・室町時代になって多く見つかるようになるため、この頃から広く庶民にも定着していったと考えられます。

これらは10年前からそれほど変わっていない特徴となります。

自分専用の箸があるのは日本と韓国だけ

現在、自宅で食事をするときに自分専用のご飯茶碗・味噌汁椀と箸があるのは、米食文化圏で日本と韓国だけとのことです（佐原真1996など）。お米を食べない文化圏でもmyスプーン、myフォークはないとのこと。日本は、食器に対する思い入れが強い国だと言われています。

箸の先端から食べ物の変化を考える

新潟県で見つかった箸を時代別に比較すると、面白いことが分かりそうです。現在、検討・集計中のため途中経過をお伝えします。

奈良～平安時代の箸の先端は、角張っているのに対し（写真１）、鎌倉～室町時代は今と同じように先端の尖ったものが多くなります（下写真２・３）。なぜか。箸で食べるお米の粘り気が変わった可能性を考えています。近年の研究では、奈良・平安時代のお米は、今と違ってパサパサしたもの。平安時代末から鎌倉時代には、今と同じように粘り気の強いお米になったと言われています（小林2017）。お米の粘り気と、箸の先端には関係があり、先端が角張った奈良・平安時代の箸はオカズ（副食）用、お米は手食か匙食。「平安時代末から鎌倉時代になって、お米の粘り気が強くなるので先端の尖った箸でお米も食べた」という仮説を立てて検討しています。　（滝沢規朗）

1　2　3

写真　箸
（1：柏崎市箕輪遺跡・奈良～平安時代
２：新発田市住吉遺跡・鎌倉時代、３は２の拡大）

【参考文献】
佐原 真1996『食の考古学』東京大学出版、高倉洋彰2011『箸の考古学』同成社、小林正史（編）2017『モノと技術の古代史　陶芸編』吉川弘文館

埋文
コラム

まいぶん！これが最前線！　再出発Vol.1
鉄斧に付着した「ウジ圧痕」の意味するもの

新潟県埋蔵文化財調査事業団が1996年に発掘調査した長岡市姥ヶ入南（うばがいりみなみ）遺跡では、弥生時代後期末頃に築造されたと思われる周溝墓が検出され、その埋葬主体部から鉄斧と鉄剣が出土しました。

鉄斧（図１）は、長さ14.4cm、刃部幅5.9cm、重量807.35gの大型品で、その形態的な特徴から、朝鮮半島で作られた可能性が高いと考えられています。

ここで注目したいのは、鉄斧の表面に厚く付着した錆（さび）の中に、多数の幼虫状の圧痕（図２・３：平均長5.7㎜、幅1.9㎜）が認められたことです。この正体を突き止めるため、圧痕の中にシリコンを流し込んで型を取り、それを顕微鏡で観察したところ（図４）、ハエの幼虫であるウジの蛹（さなぎ）（以下、「ウジ圧痕」）であることが判明しました。さらに、錆の別の場所から木の板の圧痕も見つかりました。つまり、この鉄斧は木製の板（棺の底板？）の上に置かれ、その周辺には大量のウジの蛹が存在したと想定されるのです。

ハエは腐敗物に産卵し、ウジ、蛹を経て、産卵から２～３週間ほどで成虫となります。ハエは明るいところで活動する習性があることから、鉄斧は腐敗した遺体とともに一定期間屋外にあったと推測されます。古代には、身分の高い人が亡くなると、喪屋（もや）に遺体を安置し、そのよみがえりを願う儀礼（殯（もがり））が行われたとの記録があります。では、「ウジ圧痕」は弥生時代の殯を示す証拠となるのでしょうか。

現在、50か所ほどの遺跡から「ウジ圧痕」が確認されていますが、そのほとんどが姥ヶ入南遺跡よりも数百年新しい古墳時代中～後期のものです。また、鉄斧と一緒に出土した鉄剣には「ウジ圧痕」が全く認められず、その理由が上手く説明できません。殯と断定する前に、「ウジ圧痕」が生じる様々な可能性について、さらに研究が必要のようです。

遺跡や遺物に残されたわずかな痕跡の観察を通して、過去の人々の営みを復元、検討するのが埋蔵文化財調査の醍醐味です。そして、文献等を参考にしながらも、それを批判的に検証する作業も不可欠です。ひとつとして同じもののない遺跡の個性をいかに引き出すか、埋蔵文化財専門職員の技量が問われる場面でもあります。

（新潟県文化行政課　渡邊裕之）

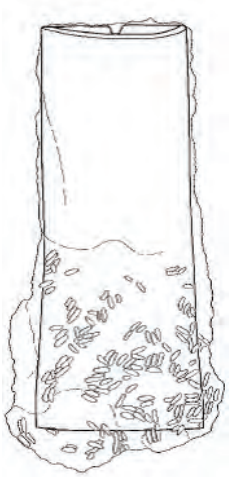


図１

図２

図３

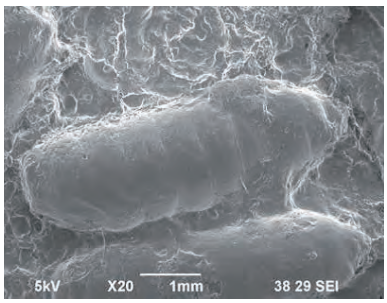


図４

姥ヶ入南遺跡から出土した鉄斧と「ウジ圧痕」

埋文
コラム

わが町の文化財紹介 －佐渡市－
佐渡金銀山遺跡

佐渡市には我が国を代表する鉱山遺跡であり、世界文化遺産登録を目指す、佐渡金銀山遺跡があります。

佐渡金銀山遺跡は相川金銀山、鶴子銀山、西三川砂金山の３つの鉱山からなり、500ヘクタールを超える広大な面積が国史跡に指定されています。

この３つの鉱山は金銀鉱床や生産体制に異なる特徴を有し、戦国時代末期から平成元年の休山までの長きにわたる金銀生産活動の各段階を代表する遺構や鉱山施設が鉱山ごとにまとまりを持ち、良好な状態で佐渡島内に広く分布しています。

また、鉱山活動を契機として生まれた西三川砂金山由来の農山村景観や、相川の鉱山及び鉱山町の景観が国の重要文化的景観に選定されています。

このように多様な見どころがある佐渡金銀山遺跡を紹介するガイダンス施設「きらりうむ佐渡」が、2019年４月に相川地区にオープンしました。

「きらりうむ佐渡」は佐渡金銀山への玄関口として、佐渡金銀山の魅力や価値を分かりやすく解説し、現地見学の拠点となることを目指した施設です。館内の展示室では、「黄金の島」として国内外に知られた佐渡金銀山の概要を大型映像、模型、グラフィック等で分かりやすく紹介しています。また、施設内には観光案内所があり、ガイドツアーやガイドアプリを活用した史跡やまち歩きのための現地情報を提供しています。

佐渡金銀山の見学の際には、「きらりうむ佐渡」にも是非、お立ち寄りください。「きらりうむ佐渡」は有料です。詳しくは公式ホームページをご覧ください。

https://www.city.sado.niigata.jp/z_ot/kirarium/

（佐渡市世界遺産推進課　相羽重徳）

佐渡金銀山を代表する採掘跡「道遊の割戸」

江戸時代最後の姿を復元した「佐渡奉行所跡」

きらりうむ佐渡　外観

きらりうむ佐渡　展示室

県内の遺跡・遺物 113

国指定重要文化財（考古資料）

平成23年６月27日指定　新潟県佐渡奉行所跡出土品928点
遺跡所在地：佐渡市
遺物保管：相川郷土博物館

江戸時代、佐渡は金銀山経営のため徳川幕府が一国を管理する直轄領でした。佐渡奉行所は、慶長８（1603）年に佐渡代官の大久保長安により、新たに相川を佐渡の政治・経済の中心とするために建てられたもので、建設当初は現在の２倍の敷地面積を持ち、書院造りの建物や茶室などを備えていたといわれています。

その後、佐渡奉行所の建物は火災による消失と再建を５回繰り返し、明治維新後も役所や学校として改築されながら使われました。

昭和４（1929）年には、国史蹟に指定されましたが、昭和17（1942）年の火災により建物は全焼し、史蹟指定が解除されました。その後、平成６（1994）年には「佐渡金山遺跡」の一つとして、再度国史跡に指定されました。

佐渡奉行所跡では1994年度から1998年度にかけて復元整備のための発掘調査が行われ、絵図に描かれた奉行所建物の基礎や井戸、石垣、水路等の他、金銀選鉱・製錬に関連する遺構が地中から発見されました。また、佐渡奉行所のもつ機能や当時の生活をうかがい知ることのできる金銀生産のための道具の他、陶磁器や木製品、金属製品、石製品等、多くの遺物が出土しました。その中でも、金銀山が最も栄えた17世紀前半の陶磁器類や金銀製錬に関係する遺物等928点（鉛板172点、陶磁器426点、木製品73点、石製品230点、金属製品27点）が、平成23（2011）年に国重要文化財「新潟県佐渡奉行所跡出土品」に指定されています。

佐渡奉行所の出土品の中には、経年による補修材や補強材の劣化等により脆弱となっているものや、一部破損しているものもあります。この状況を改善し、将来にわたり適切に保存していくために平成24（2012）年度から10か年計画で重要文化財の保存修理事業を行っています。保存修理事業の様子は、佐渡市ホームページで公開しています。是非、ご覧下さい。

https://www.city.sado.niigata.jp/site/mine/

（佐渡市世界遺産推進課　相羽重徳）

小川忠博撮影

重要文化財指定品

小川忠博撮影

重要文化財の鉛板（１枚長さ約70㎝ /40kg）と木簡

埋文にいがた 第115号　令和３年７月30日発行
発行　新潟県埋蔵文化財センター　Niigata Prefecture Archaeological Research Center
指定管理者：公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地１　TEL：(0250)25-3981　FAX：(0250)25-3986
E-mail：niigata@maibun.net　URL：https://www.maibun.net/
『埋文にいがた』のバックナンバーは（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 HP でご覧いただけます。
上の URL からご確認ください。